

軒端の鶯：『蜻蛉日記』の「のたちからし」について

今西，祐一郎
九州大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/9373>

出版情報：語文研究. 88, pp.22-31, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

軒端の鶯

——『蜻蛉日記』の「のたちからし」について——

今 西 祐 一 郎

一

人の訪れを心待ちにしているとき、それらしい行列の気配がする。しかし行列はわが家の門前を通り過ぎ、その人は訪れない。このような場合を「前渡り」という。この事例については、今井源衛「前渡り」について（『紫林照径』所収）に詳しい考察がある。

近江という名の新しい通い所の出現によって、兼家から再三「前渡り」の悲痛、屈辱を味わわれた道綱母は、ついに「前渡りせさせ給はぬ世界もやあるとて」という書き置きを残して、京を離れ、西山の寺に籠もった。天禄二年六月のことである。

人気のない、山に囲まれた寺の坊では、勤行の合間に簾を巻き上げくつろいでいると、時節遅れの鶯が元気に鳴く。鶯

の鳴き声を「人來々々（ひとくくく）」と聞きなす平安朝人である道綱母は、思わず巻き上げてあった簾を下ろしてしまいたい。そうになる。

さて昼は日一日、例の行ひをし、夜はあるじの仏を念じてたてまつる。めぐりて山なれば、昼も人や見んの疑ひなし。簾まきあげてなどあるに、この時すぎたる鶯のなきくく、のたちからしに、ひとくくとのみいちはやくいふにぞ、簾おろしつべくおぼゆる。そもうつし心もなきなるべし。（中巻 天禄二年六月）

難解な『蜻蛉日記』のなかでは、わかりやすい内容の一節ではあるが、ただし「箇所」の「のたちからし」という意味不明の語句がある。それは『蜻蛉日記』の伝本すべてに共通し、異文はない。

この意味不明句は、従来、契沖の書き入れによって「木」一字を補い、「木の立ち枯らし」の意に解されてきた。それを明記したのは、『かげろふの日記解環』である。

原本ニ木ノ字ヲオトセシ。今、契本ヲ以オギナフ。立死、
曰「レ榊ト注セリ。榊ハ榊ノ正字ニテ音ハ支ナリ。

そして『解環』は次のように本文を立てた。

この時すぎたる鶯うぐいすのなきくうぐいすて木のた
ちがらしちがらしにひとくくひとくくとのみちはやくいとら（いふにぞ）

この時すぎたる鶯うぐいすのなきくうぐいすて木のた
ちがらしにひとくくひとくくとのみちはやくいとら（いふにぞ）

すなわち、現行『蜻蛉日記』の本文には、「木」が脱落して
いるというのである。そして今日の諸注釈書は、すべてこの
「木」脱落説にしたがう。

立ち枯れの古木に鶯が鳴くという情景は、一見、山寺にふ
さわしく、いかにもありそうなことに思える。けれども、
「木」はいいとして、「たちからし」を「立ち枯らし」と解し
て、枯木の意というのはどうか。おそらくそのような語はか
つて存在しなかったであろう。しいてそれに近い語を挙げる

とすれば、現代語にも残る「立ち枯れ」か。

修行し侍りける時、雪のふりける日、山の枯れ木を
見て
前大僧正道慶

そま山の榊のたちがれ枝をなみおのれぞ白き雪はたまら
ず
（万代和歌集 卷十六・三二二九）

わがやどの杉のたちがれ年ふりて知られぬ谷に幾代へぬ
らん
（如願法師集 八九）

『新編国歌大観』CD-ROM版で検出した二例の「立
ち枯れ」が、ともに僧侶の歌であるのは、道綱母の籠もる山
寺の景物としても似つかわしい。そのせいかどうか、近時の
注釈書の多くは、『解環』に倣って当該箇所「木」を補い、
さらに「たちからし」を「たちかれ」に改めて、「木の立ち枯
れに」という本文を立てる（『蜻蛉日記全注釈』、『校注古典叢
書』、『日本古典文学全集』、同新編、『新潮日本古典集成』な
ど）。

このように改訂された本文の目にする読者は、その前
後の文章を不自然とも思わず読み進むかもしれない。しか
し、「のたちからし」という諸写本、板本の本文を知る者に
とっては、不審は依然として残る。

かりに「木の立ち枯れに」で文脈が落ち着くとしても、そ

の落ち着きをもたらすために、本文にない「木」を補い、「らし」二字を「れ」一字に置き換えて「のたちからし」から「木のたちかれ」を作り出すという、かなり強引な操作がそこにはある。その強引な操作は、その強引さゆえに、本文批判として他に考えようのない妥当な、あるいは窮余の策であったかどうか、再考されてもよいであろう。

二

伝来の写本、板本の本文に対して、どうにも解釈のしようがない場合、その本文には何らかの欠陥があるのではないかと疑うことは、やむをえない。そして、そのような本文に対しては、欠陥の修復、本来の姿への復元が期待される。

ただし、その欠陥の修復、本来の姿の復元は、表面的な文脈の整合だけを目指す、観念的あるいは便宜的なものであってはならない。文脈の辻褃合わせに急なあまり、恣に誤字、脱字を想定することは、なるべく避けるべきである。誤字、脱字を想定する前に、伝来の本文の字形を見つめ、その字形の類似、相似から、伝来の本文の背後に、別の本文の可能性を推定するいうことが必要である。

「のたちからし」に即していえば、その意味不通の文字列に、安易に「木」二字を加えたり、「らし」二字を「れ」に変えたりという荒唐治療を施す前に、変体仮名の類似、相似が原

因で、本来の本文が「のたちからし」という意味不明の文字列に化けてしまったのではないか、という可能性を考えてみるということである。

これは日本古典文学の本文批判においてはとりたてて目新しいことではなく、夙に『かげろふの日記解環』の著者坂徴によっても主張されていたことであった。坂徴は、『蜻蛉日記』の本文校訂について、

契沖諸本ニ直シノ無所ニ及デハ、止事ヲ得ズシテ憶説ヲモテアナグリ求メキ。ソノ求ムベキ手ヨリハ万ノカナノ転訛セルヨリオシハカリテ、ヤ、本ニ復サンヨリ外ニ又術ナキコト治定セルニヨリテナリ。

と、主として「仮名の転訛」を本文復元の手がかりにせざるをえないことを述べ、変体仮名の「そ（尊）」と「う」、「ら」と「る」、「な（那）」と「れ」の類似、あるいは「に」の篇旁を脱して「こ」となり、また「所（そ）」と「に」、「江」と「ひ」の紛らわしき、等々の例をあげる。この種の事例の一つは、写本、板本で本文に接したところのある読者なら誰でも経験済みことであるが、『解環』の功績は変体仮名の転訛という現象を逆手にとって、それを本文復元の手だてとして最大限に活用したことにある。

この方法が、近代になって、池田亀鑑『古典の批判的処置

に関する研究」第二部「国文学に於ける文献批判の方法論」の第十五章「日本古典作品に於ける本文転化の諸類型とその実例」において集大成されたことは周知のとおりである。この視点は本文批判の基本としてつねに古典研究の指針であり続けるであろう。

本稿もまた、この指針に沿って、意味不明の「のたちからし」から本文の復元を試みるものである。

『解環』の響みに倣って「のたちからし」という本文に対し、しかるべき字体転訛の可能性を想定した結果、「のたちからし」から「のきちかく」という復元本文が得られる。その理由は、「のたちからし」を、「た(多)」↓「き」、「らし」↓「く」という、字形の類似により生じた転訛本文と見なすことができるからである。左に桂宮本の影印を掲げる。

この時とびらううかひよつなまきへ
のらうまひらうのさく

まず「た(多)」↓「き」の転訛について。^(注2)この転訛例は、一見転訛例を網羅したかに見える『古典の批判的処置に関する研究』にも指摘されていないけれども、柿本奨『蜻蛉日記全注釈』下巻付載の、桂宮本を底本とした「誤写一覽」によれば、以下の三例を数える。

いぬる五日の夜の夢に、御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふとなん見てはべる。これ、ゆめとたにはとせ給へ。

(下巻 天禄三年二月)

れゆめとたにとせ給へ

(注3)

という文中の、「ゆめとた」が「ゆめとき(夢解き)」、

四日もさて暮れぬるを……夜中ばかりに火のさわぎするところあり。近しと聞けど物うくて起きもあがられぬを、これかれとふべき人、徒歩からあるまじきもあり。それにぞたたいて、こたへなどして……。

(下巻 天禄三年閏二月)

の「たたて」が「おきて(起きて)」、

おきてふれとていそむえなり

(注4)

県ありきのところに産屋のことありしを、えとはで過ぐしてしを、五十日になりけん、これにだにと思ひしかど、ことくしきわざはえものせず、ことはたをぞさまくぞしたる……。

(下巻 天延二年一月)

日記』の当該箇所はたして従来に比して前後の文脈によりふさわしい文章になるのであろうか。

これまでの改訂本文の趣旨は、「木の立ち枯れ」で鶯が鳴いて道綱母を驚かせる、ということであった。「立ち枯れ」が歌に詠まれることは第一節で見た通りであるが、しかしそれは稀な事例であり、「立ち枯れ」で鳥が鳴くというような情景が歌に詠まれることはなかった。たんに例がないということだけではなく、この場合、その「立ち枯れ」の木はどこにあったのか、ということを考えて、少なからぬ都合に直面する羽目になる。

その枯木が、道綱母のいる僧坊の前栽にあったと考えるのは、前栽というものの性格から考えて不自然である。それならば、枯木は、その前の文で「めぐりて山なれば」と記された、山寺をとりまく山中にあったのか。しかし、もしそうなら、幾分は距離を置いた鳴き声（「ひとくくく（人來々々）」が道綱母に一瞬簾を下ろそうと身構えるほどの驚きを与えたということが、これまたいささか納得しにくい。

そのような枯木説の難点は、「軒近く」という本文によって瞬時に解消されるであろう。軒近くに植わる木に鶯が来て「人來」と鳴いたのなら、道綱母の驚きも当然だからである。

さて、「梅に鶯」の諺をまっまでもなく、鶯が来て鳴くのは梅の木である。しかもそれは前栽や建物の隅に植えられることが多く、おのずから軒近くに位置し、鶯を招くことになる。

前栽に紅梅をうゑて、またの春をそく咲きければ

藤原兼輔朝臣

宿ちかく移してうゑしかひもなく待ち遠にのみにほふ花かな
（後撰集 春上 一七）

まへ近き梅の花の咲きたりけるを見て

宿ちかく梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり
（猿丸集 三一）

この東のつまに、軒近き紅梅のいとをもしらく匂ひたるを見給ひて……ついでに忍びがたきにや、花折らせて急ぎまゐらせ給ふ。……

心ありて風のははす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき
（源氏物語 紅梅）

「この時すぎたる鶯のなきくゝて、軒近くにひとくくくとのみちはやくいふ」という復元本文は、以上のような鶯をめぐる情景にびったりではないか。道綱母ときわめて関わりの深い歌人、すなわち古賀典子氏によって、あらためて道綱母の同母弟であることが検証された藤原長能にも、次のような歌がある。

我が宿の軒端の梅やさきぬらん鶯きなく声きこゆなり

本文は、一段と現実味を帯びてくるであろう。

四

道綱母が鶯の「ひとくく」という鳴き声を聞いて、簾を下ろそうという気持ちに駆られたのは、鶯がこの歌のように、耳近く「軒端」の木で鳴いたからであった。

もっとも、平安文学輪読会「長能集注釈」の指摘によれば、この歌の「軒端の梅」という表現は、異本では「垣根の梅」であり、

「垣根の梅」は道済集、一三九(鶯)けさ見れば春きに
けらしわが宿のかきねのむめに鶯のなく、後拾遺集春
上、五五「山里にすみ侍りけるころ梅の花をよめるよ
み人しらず わが宿のかきねの梅のうつり香にひとり寝
もせぬ心地こそすれ」などの例があるが、「軒端の梅」の
方は、千載集春上、二九、権大納言実家「風わたる軒端
のむめに鶯のなきて木伝ふ春のあけぼの」などの平安末
期の例しかさがせない。長能の新しい用語なのである
う。

という。だが、たとえ「垣根の梅」であっても、山寺の僧坊のそれは「軒端の梅」と大差ない。右に指摘されるように、「軒端の梅」が「長能の新しい用語」であったとすれば、鶯が「軒近くにひとくく」とのみちはやく「鳴く」という改訂

なお、本稿で取り上げた一節については、「のたちからし」のほかに、その直前「この時すぎたる鶯のなきくく」中の繰り返し符号「くく」も一考を要する。これは「鶯のなきなきて」と読んでも意味が通らなくはないので、従来まったく問題にされなかった。しかし、注意して読むと、この「なきなきて」という表現は前後の文脈に適合しているとは必ずしもいえない。

「なきなきて」という反復表現は、「ありありて」や「行き行きて」と同様、ある状態、動作の継続を示す表現である。「ずっと恋い続けて」の意を表す「こ(恋)ひこひて」も同種の例であろう。

こひこひてあふ夜はこよひ天の川霧立ちわたりあけずも
あらなん (古今集 秋上 一七六)

こひこひてまれにこよひぞあふ坂の木綿つけ鳥はなかず
もあらなん (古今集 恋三 六三四)

こひこひてあはむと思ふ夕暮れはたなばたつめもかくぞ

あるらし

(後撰集 秋上 二二二)

「なきなきて」がこのような表現と同類であるとすれば、道綱母はある程度の時間「ひとくひとく」という鶯の鳴き声を聞き続けていたわけであり、とすれば、その「聞き続けていた」(鶯が「鳴き続けていた」ということと、後続の「ひとくひとくとのみいちはやくいふにぞ」との続き具合には、いまひとつ緊密さが欠ける。というの、

ひとくひとくとのみいちはやくいふにぞ
簾おろしつべくおぼゆる。

という文の勢いは、人目のなきに簾も巻き上げたくつろぎの時を、折しも飛来した鶯の激しく鳴く声(「ひとく(人來)」に中断された道綱母が、一瞬、簾を下ろさなければという警戒心に駆られるという場面にこそ似つかわしいからである。「なきくゝて」という鶯が鳴き続ける状況のもとでは、この緊張感は生じないのではないか。

ところで「なきくゝ」に用いられている繰り返し符号「くゝ」は、流麗な連綿を旨とする平安、鎌倉時代の古筆では、しばしば他の文字、符号に紛れやすい形を示す。前掲『古典の批判的処置に関する研究』第二部には、「符号相互間の混同」、「文字と符号との混同」の項が設けられ、「くゝ」に関し

ても典型的な実例が掲げられている。たとえば「くゝ」と「くゝ」「こ」と「くゝ」「くゝ」と「くゝ」等の混同である。前述のように文脈上いささか不安定な「なきくゝて」については、その三番目の事例を適用してもよいのではないか。すなわち「なきくゝて」の「くゝ」は、「くゝ」の連綿による仲長の所産であり、本来は「なきくゝて」であったのではないか。「なきくゝて」とは、もちろん「鳴き来て」の意である。しかしこの改訂案には、「鳴き来」という語の用例が見出せないという弱点が伴う。鳥が飛来して鳴く情景は、『万葉集』以来、「来鳴く」という語で詠まれてきた。

鹿背の山木立を繁み朝さらず寸鳴響為(きなきとよもす)鶯の声 (万葉集 卷六・一〇五七)

つね人も起きつつ聞くぞほととぎすこのあかときに来喧(きなく)初声 (万葉集 卷一九・四一七二)

わがやどの池の藤なみさきにけり山ほととぎすいつかきなかむ (古今集 夏 一三五)

軒ちかくけふしも来鳴くほととぎすねをやあやめにそへてふくらん (千載集 夏 一七〇)

それに対して「鳴き来」という語は歌語としてはもとより、散文にも見出しがたい。けれども道綱母が『蜻蛉日記』中で、たとえば「たたき来」、「うたひ来」といった、これまた他の作品には見えない同じ語構成の語を使用していることを思えば、「鳴き来」という語の存在にも可能性はある。

とはいうものの、『蜻蛉日記』には、他にも、

うらもなくたはぶるれば、いと妬さに、こゝらの月ごろ
念じつることをいふに、いかなる物とたえていらへもな
く、寝たるさましたり。聞きくゝて、寝たるがうちおど
ろくさまにて……………。(中巻 天禄二年二月)

また、尚侍の殿よりとひ給へる御かへりに、心ぼそく書
きくゝて上文に……………。(中巻 天禄二年六月)

「何事によりて」などありければ、とばかりありてこの
ことをいひ出だしたりければ、まづともかくもあらで、
いかに思ひけるにか、いとみじう泣きくゝて、とかう
ためらひて……………。(下巻 天禄三年二月)

よろづ書きくゝて、「霞にたちこめられて、筆のたちども
知られねば、あやし」とあるも、げにとおぼえたり。

(同)

といったように、『源氏物語』や『枕草子』には見出されない
反復表現がかなり見られる点を考慮すると、それは道綱母独
特の言い回しであったとも考えられ、本文改訂にはなお慎重
を要するであろう。^(注10)

注1 上村悦子編「笠間影印叢刊」による。

2 ただし「た」を「と」に作るのは桂宮本のみ。大東急記念文
庫本、神宮徴古館本、阿波国文庫本、国会図書館本、岡山大
学本、板本は、いずれも「た」に「堂」の字母を用いる。彰
考館本は桂宮本と同じ「多」を字母とするが、字形は「あ」。
彰考館本、大東急記念文庫本、神宮徴古館本、板本も字母同
じ。阿波国文庫本、国会図書館本は「と」に「堂」の字母を
用いる。

4 板本のみ「た」の字母同じ。彰考館本、大東急記念文庫本、
神宮徴古館本、阿波国本、国会図書館本は「た」の字母に
「堂」を用いる。

5 大東急記念文庫本、神宮徴古館本、阿波国文庫本、国会図書
館本、板本も字母同じ。彰考館本のみ「た」に「あ」を用い
る。

6 新日本古典文学大系『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』解説「梁
塵秘抄の本文と用語」。

7 河原武敏『平安鎌倉時代の庭園植栽』(信山社)は、建物の入
隅と出隅への植栽を「建物隅植栽」と名付け、それをさらに
「入隅植栽」、「出隅植栽」に分けて、『北野天神縁起』、『男衾
三郎絵詞』、『法然上人絵伝』に描かれた紅梅を指摘する。

8 『蜻蛉日記』解釈の基盤——道綱母の邸宅と出自・通説批

判」(上村悦子編『王朝日記の新研究』所収)。

9 まだ物たしかにも見えぬほどに、はるかなる梶の音して心ほそくうたひ来る舟あり。
(中巻 天禄元年七月)

御魂など見るにも、例のつきせぬことにおぼゝれてぞはてにける。京のはてなれば、夜いたうふけてぞたゞき来なる。

10 その意味で、拙著、岩波文庫『蜻蛉日記』において、「なきく」を「なきゝて」と改めたのは勇み足であった。
(下巻 天延二年十二月)

(いまにし ゆういちろう 九州大学文学部教授)